へ 13
3948
3

内閣

繪本三國妖婦傳下偏巻之三

目録

狐人民城備ふ　八郎上京して玄東城奏す
狐人畜城害し食ふ圖
八郎再び野干狩して狐穴城穿す圖
八郎が妻俄よ狐人となる圖

門へ13
號3948
卷3

公卿泰親城を攻て洋海の圖
八郎神境城携て下るもとる圖
狐泰親に化し八郎城御もを山尾と以て化をとゝ
八郎山尾城携泰親が正體城見る圖
八郎泰親に化し狐城斬圖

繪本三國妖婦傳下編卷之三

狐人民を傷ハ英八郎上京して奏事を奏す

扨も九尾の狐ハ今上城山怪物ありしを取鎮ゝ神國の大日本いとゝ魔魅のかよとり
潛入城忠義ハ播磨守安倍泰親男乃の功城ありく
尺形し神力の冥助を潛く禁庭城逐ふ入て下邪國
形須野ハ遁まゝ去く分城潛めくゝ唐天竺ゝ賢士名ハ
乃為ハ逐れ又行べき方もなくて中方御城入て佛家の
人城取食ひ是より八岳系にかゝれて老若男女のこゝ
ひなく往来乃旅人又ハ遠近の民家ハ入て食物乃

差別なくあるひは害し貪ひあるひは恣にして限り
なく小害せしに人はいくばくの限ありまして死して
人民の亂を絶さんとなりにあり今は順天にても厭ふ
宗須八郎宗重が家来婦女妻子ありて先るものの
多くは是の悪獄の所為なりと思ひてもさすがに八郎
畜ぐるに城郭無念なる姫君にても被人非業にして一命怪
やうなる方なり所は八郎順分の民百姓ども初の子ども二人う
二人たまたまに小子なりしかるに一日に二十人三十人の所絶る旨なく又亦或は妻子兄弟嫁賀是
ガ子ども彼がうせしと日毎の注進根の蔓に拠ふ似さり

八郎是に笑て順内のものに人数かくのごとく往来の旅
人絶まる順内ひのものあて所のさい載人なるべきや
こゝろ者まで順内ひて人うせ教害されし
或は化生に取咎られしもあるいは絶順の評判を待んも
公外ふ家滅ふ所須家の眷属ふ者ふ今毛九尾白面
の畜生の所為ふて行為ふ然ふ人ふ惜ふ無までも施ふ
外器なるに無ふいとうるもあれば京須地の恵を
多勢ふて多も減さんに取ふ陽にまでも牧ふ
陸の獄ふ人見ふけまで命ふ極りふても多くの
形なるに殺ふ入ふ羅仏ふ毛色黄金のごく尾

きるどんち
杤人畜ぢ害
喰ふ圖

九つあつて面の白き極く尺ばいなるふも取まのてとてき
一分の功を爭ふに射るも寄るも斬るも降るも値い
七ばかりと働きの仕方まで十分さしも仁慶き形頭
世の京城大人數まて云卷つ巻るの肉よい新見弟妻
るの歌の極なれば逸をまつ隠せまつと勝しいこんぐ
むふるの多きれいるる魔生もたまるくさとい見くぐり
りされども指出さるい唯指慶積鬼のこ毒毎く出るい
痩極二欲二日遺間も形く指美せども〆ぐく分けん彼恵
極いこのげも見こび山の奥はらぐき穴とおぐ〆き亦仁山の
ぐく人の骨を積中まき咽吮あるしい魚亦のこ癒つも嘯

鄭一てまぐるるこび積こ一其戸を数まれも八郎生
従是城見くく大ま強き此極るあそ八國中八初亜陽西乃
人城級さんまづけ穴こて栖ろこんいぐ城密寺とお郎長
大勢新寄て城こ一れども味無魚る骨打乱根をつく
るのこ中て極るわこび八郎宗重せんこなく椅をそで
めて鈴ま咽りさ海ぐ二夫をめぐこせども自力まおのでび
此こ人京郎く沒遥一遥治の山勢城郎ぐ一されも
使をりけく養せんい等南ま仰くれば自身をせ出り毎
沒貴一一養鼠せんと旅の男言を撫くせでに有こけ
おるぐべーと思ひ一和八郎が妻織ま毎人ようりいぐまを

書林小玉

実いづれを虚なりと見分がたく顔色風俗言語より衣服
持事何ひとつ違ふことなく是もろの古狐が為しけるぞ
されバ是非妻人ハ狐の化しゝ紛なけれバ天命をおそれし縊り
あげ思ふまゝに殺し背憤を散ぜんものとさわぐ心を
責まても入分るを投げてたる後も須菲なく出立
を延引しけるは甚内も須分の夫人の消へ失し止時なし
八郎急度思惟しいかにしても妻去人に諸人の驚ろく
さわがしいづれを上京してかゝる変事も消べしと奈須より
都へ百五十餘里の旅路を日につゞいそぎし程ま七日目
の昼時は京着して関白殿下の館に伺公し長臣を

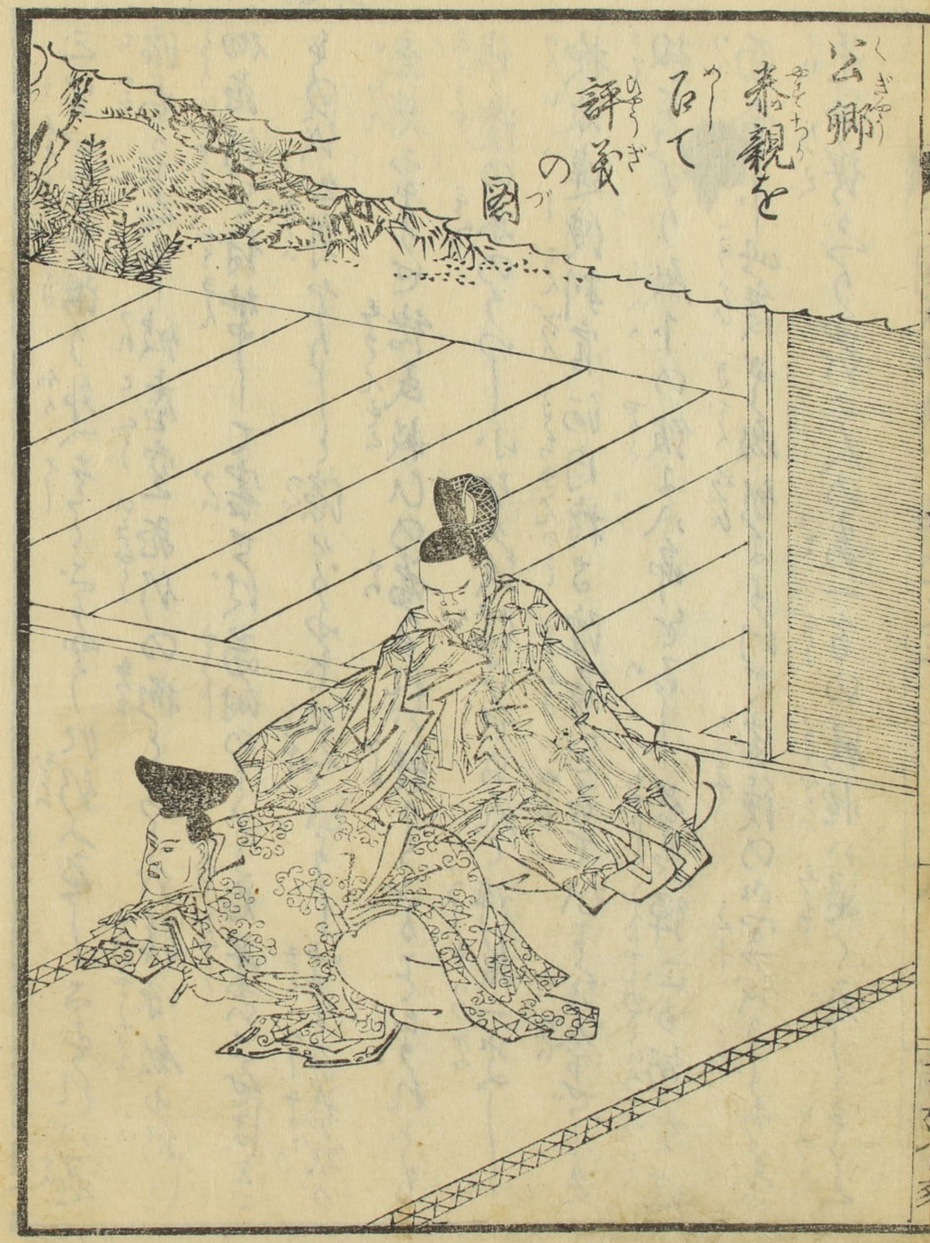
對面ありひそかくの変事ありて須進仕らんじま
退治の清僕を下しおかれ候ハゞと上奏せしかバ讒
説しけれバ秦淨正が弼量満是ぞ承とゞけ殿下へ申
上ければ殿下忠実公清滝に内大臣忠通公ほか父子なき
おし召し使の庭より出御活あるべき旨旅館ましめく
るべしとの挨拶ありけれバ八郎宗重畏て退散はされ
より殿下参内ありて八郎が須進の趣ぞ公卿僉議はし
くなる処播磨守泰親所法まかりて正體を顕し若
くる悪狐なれバ此上も法をもつて退治の仕方あるべきや
られバ百て泰ひ入をも同ぎ節るべしとありて泰親を召

八郎が
妻俄ふ
二人と
ゝる圖

此事試尋ねべきほどに考てやうやく八郎八命が妻妾人
ふなるべしいまだ人の極中を窺まどもそれらしかさうべし
人民助けの出遊ましまべ神宝のうち宝剣のうち一振
八岐の出潢のうち一面のうちいづれもありとも八郎が出
あるべきなりべきもの人の悪婦亡んで堂塔さびがごと
悪極遐治の事いと容易なるべし是を英雄の武士に頼
て勅ありて人数を指出し害せしむるの外いかんぞ
ぞも神通自在の古狐千年を経たるの術ある
なれば地獄に落るのみにて浮んとは叶ぬ系かしこにあり
むき法を修し祈祷試てぬ百里の外をも検めく

三里四方を隔り外へ出てぞ出されば遐
治安なるべし彼虚空祈祷の極まるべ清涼殿
御祈祷を封禁して害せば尚村のごく悪業いさぎよき
もの紙公外なりしと源なるべし公今は
意見ありて世諸民救ひの為なれば軽うざるとなれども
神後の末のうつ小なる紙信させのんと評議一決し
検断違使判官河内掾を隆
扶とんより殿下の彼は八郎を召
面會し此度半殿より
是を携へうるべ二人の妻一方の妖怪は遐

公卿
春親を
召て
評議
の
図



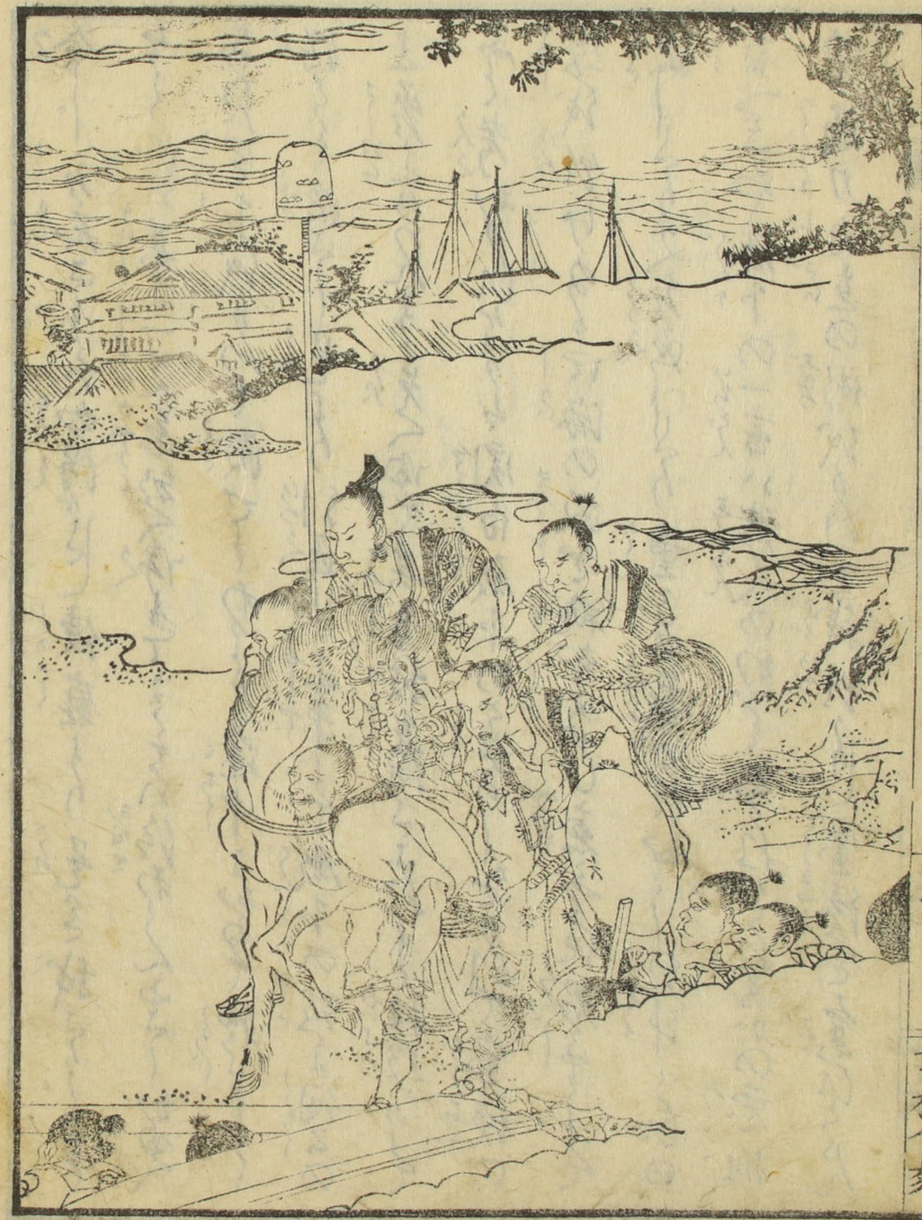
家族に変事なく領内よりある化生も民ふ害成ることなく
叶まじく勢ゆゑ退治の出概をかさるべきなれば安堵あるべしはいよ使の飛脚内侍る隆房清門より召て達せるべき
旨を言成渡るべし遠路出系せられふりて殿下
法皇通作なられ神理下のみのもお達し被なく
殿下出遊ありて出丁寧の出命釈ゆり左切の恐縮
らば速よ帰国せべしと出脈のりもて河内侍る隆房
八郎成て宝渡の出写一成お渡せば八郎い一天乃
内恵寵加の仕合内稽をやと旅蛾よ立ゆり宝渡の郎
を初も清潔よ新綱せ一樋よあるは自分に泊連を引

業ふ〳〵勢を打立て京須へさして上りける
極恭親よ化一八郎を祝せ妻山島の尾を化生知る
新て京須八郎宗重を神渡の写成沈緒命一所晴る
さやく恢異成清め領内静穏なるもべしいさみ
恢び勢を打立ては清まさるか重勢多の橋をち渡
らんせ一府作り一郎の人馬遊りけるの形須
八郎反命ふ〳〵ぞ志ぶ〳〵と表成りけ来る彼乃
結志人うけぬけ来て云ひ〳〵八郎白
殿下の命をうけ召下に達せる旨を見まで来りし
るをとゞめて作るべしと恩を切て演ひ〳〵ゆゑ八郎成り

八郎
神鏡を
携へて
帰國する
圖

何事ぞやと恭親がうるさく問ひければ、恭親がいとく是下の国あるよ
事に成るとのみて、後を終へ
ずして宝漢のうつを偽り、公々の内よりうつ
さうぐ喜のし聞めつるうもあれば、菓子取出し
の公々澤見あつてふたゝび又菓子一渡し第せよと
命ずるゝ処殿下の仰に渡さうぐしと云れい八郎中て仰の
ありむきを承るかくのごく大切小用ゝ事なる所く今
渡さんといへ共一ちれども是を是下のなりに偽らう
所のもなく殿下の頼みて渡されしもあるべし使龍を
偽らう則系所り書面をさゝと取出し是下に

命じ玉ふ所さうに如得ぐに使龍うり是を載さうとて
ちうぐ渡ん暮る一先系物く帰きてうたい仰せあんまさ如く
あれ是下ばりつて渡せしあるも遂中よりあて物ぐく
得うて渡さぐ是をうり是下一上系して殿下の頼より何ての
上意とはうんまり先く問て其旨被為ぐさるとて接待かて
て考ありけるうに関白殿下のうつをうつて宝漢の
写ば所けあるに海の政を挑おるひ恵ふに君まして
渡しうり又ふ為しうり童子の戯まに記ゝ沢ゝしの
有べきや殿下の一言ハ諸人のかゞみあるべきこれもかの悪狐
めが通力自在の術ばりつて我ばうり宝漢を奪ひたん



八郎
山鳥の尾を
携て
恭親が
亡骸を
見る圖

とくるまあるべきなれども懐異化生の障碍のごとく遠
されしよりあくまで悪極不測の神通を深くもいで神境の
うちに近きものあんやそれを奪いとらんとすること功能
分も畜生なればそれまでおいかぶりやまじく見て泰親と
ぐけ古狐なるべしさてんるかの日泰親源切をとりしく
我よあくまで山名の尾の翁十二枝ひしゆそあやしく思ふ
このはこれを輪よりあり取きうれば正躰見やとおもふ城
持ちて懐中せし見所中て客にうんぐ義しぐ
なり見れい面を則狐なり悔きやりる今一度神境の家
あそたやしてくまんときあるぬてんきて彼にむしい法ぐ

ありてば者を殺をかくし某ある者うり再び上京せんも
淀ひし都来もあるものいまば見下
途中の労況ひとしひのいびふてびと起き渡しのいぶ屋
もくんと馬ありられば泰親も用じ下馬して信を
尼しとなる時八郎懐中より溢るを中おさ
尾樋ひしけで泰親あんを改め渡さるれ及ぶ尾や
樋のまり渡さきよりしとなりて接拶を八郎
さんばこそとなるようあづきらやとる樋いそれば新御
せし而ありし中紀のあて使廉うり交ぶられば
通りかして呈せんと思ふことしば泰親大切の法那

八郎恭親(やすちか)船(ふね)を斬(きる)図

面目更なくんも今さらふぐと思つゝ足下同道致さまく歩に堪せ
ぬまでと驚べと俄よ変り顔と面色よさも青べと八命八帯せ
刀抜身もて世べ一対く切付れが通力自在を以て右概略して
切来も及べ乱消さてくうせよりり八命八逢中の事如何
敵をいさるよさて失関白殿下へやとんと長阪素弾正少弼方へ
使をりけてさいとべ乱古今よ品一部内よ知れべ要八えのどく
壱人と刎り百姓の害せて美う事も止々る系たちまち順内安穏
静優一々り実よ敵あるべき一天日海を知一めべ百年の君代世西
有がてくうと覚今る事

繪本三國妖婦傳下編巻之三終